のらボーイ＆のらガールの食農教育プロジェクト
― No Food, 農 Life ―

教育・研究　課外活動
ボランティア　地域交流

代表者：農学部地域環境科学科　３年　大野莉沙

連携先

阿見町役場、JA茨城かすみ、阿見小学校、実穀小学校、吉原小学校、本郷小学校、君原小学校、舟島小学校、阿見第一小学校、阿見第二小学校

顧問教員

小松崎　将　一（農学部　教授）

参加者

川又　康史（農学部地域環境科学科４年）
武石　直哉（農学部生物生産科学科３年）
八塚　　拓（農学部生物生産科学科３年）
若井　誠幸（農学部生物生産科学科３年）
小川　佳祐（農学部資源生物科学科３年）
小山　修平（農学部資源生物科学科３年）
栗原　拓海（農学部資源生物科学科３年）
酒井　健伍（農学部資源生物科学科３年）
高梨　香苗（農学部資源生物科学科３年）
鳥井　隆史（農学部資源生物科学科３年）
平野　明則（農学部資源生物科学科３年）
山口　優衣（農学部資源生物科学科３年）
大須賀　麻希（農学部地域環境科学科３年）
大野　莉沙（農学部地域環境科学科３年）
片寄　彩美（農学部地域環境科学科３年）
神田　瑞穂（農学部地域環境科学科３年）
栗原　朱菜（農学部地域環境科学科３年）
杉本　麻美（農学部地域環境科学科３年）
藤岡　みのり（農学部地域環境科学科３年）
星野　佑太（農学部地域環境科学科３年）
松本　瑛実香（農学部地域環境科学科３年）
三輪　大樹（農学部地域環境科学科３年）
山崎　恵理（農学部生物生産科学科２年）
中根　麻冴美（農学部資源生物科学科２年）
野中　玲奈（農学部資源生物科学科２年）
福木　　葵（農学部資源生物科学科２年）
勝村　　遥（農学部地域環境科学科２年）
木納　勇佑（農学部地域環境科学科２年）
篠田　優香（農学部地域環境科学科２年）
島村　宗義（農学部地域環境科学科２年）
戸野　あすか（農学部地域環境科学科２年）
新妻　拳介（農学部地域環境科学科２年）
東　　麻依（農学部地域環境科学科２年）
吉田　健人（農学部地域環境科学科２年）
和賀　智紀（農学部地域環境科学科２年）
高山　　健（農学部地域環境科学科１年）
中津　祐也（農学部地域環境科学科１年）
生田目　慶都（農学部地域環境科学科１年）
曲山　康平（農学部地域環境科学科１年）

プロジェクトの申請内容

（1）プロジェクトの概要

阿見町において地域連携のもとに学生の視点から３つの食農教育を行う。

①遊休農地を阿見町の小学生と保育園生のために整備、並びに管理を行い、農業体験とともに食農教育を行う。これにより、使用していない土地の有効活用と地域活性化につなげる取り組みを実施する。

②ＪＡ茨城かすみと提携し規格外野菜・野菜の売れ残りの現状を調査、買い取りを行い、加

工して付加価値をつけた商品開発を行う。農業生産現場では、圃場生産量の約20％が規格外野菜として圃場廃棄される。これらの有効活用により農業の再生を図る。

③ＪＡ茨城かすみと阿見町の小学校が連携した学校農園を活用した食農教育活動において、農園管理のスタッフとしてボランティア活動を行う。

（2）内容・計画

①遊休農地を活用した食育の新展開：阿見町の遊休農地を整備し、小学生と保育園生と農業体験のために農地の準備や企画を行う。小学生と保育園生は保護者の方と一緒に定期的に参加してもらう。育てる作物は蕎麦で、11月下旬に親子で蕎麦打ちを体験してもらう。

②規格外、売れ残り野菜の有効活用による農業再生：買い取りが可能な作物を購入し、その作物を活かした加工品をつくる。また、小学生にもこれらの野菜の存在や、その現状も知ってもらう食農教育を行う。商品化がうまくいけば、農学部の鍬耕祭、青空市（阿見の物産展）やＪＡ茨城かすみでの販売を予定している。

③学校農園での学生ボランティアの推進：農業体験活動を行う農家の負担減少やＪＡ職員削減の問題の解決を図るため、阿見町のＪＡや小学校と連携し、学生ボランティアとして学校農園の円滑な運営と学生の視点から子供たちにフィールドを活かした効果的な食農教育を実施するための補助を行う。

（3）期待される成果

・阿見町に存在する遊休農地の有効的な活用
・規格外・売れ残り野菜の加工による有効的な活用と新たな付加価値の創造と提案
・農学部生の視点から、学生の持つ機動力を活用したユニークな地域食育活動の発展に貢献
・小学生の農業に対する興味を持つきっかけの創造
・年齢層の違う人々の触れ合いの場の創出

プロジェクトの実施概要

①遊休農地を利用した食農教育

月	内容
６～７月	遊休農地開墾
8月24日	そば播種イベント
9月14日	土寄せ
10月27日	収穫イベント
11月23日	脱穀
12月17日	製粉
12月20日	そば打ちイベント

②廃棄野菜の有効活用

月	内容
６～７月	JA・町役場との話し合い
６～10月	余剰野菜活用案の検討
11月	鍬耕祭で販売
12月	今後の検討

「鍬耕祭」

① 学校農園管理ボランティア

月	内容
6月	落花生マルチはがし・土寄せ
7・8月	落花生土寄せ、ゴーヤ収穫
9月	落花生・ヤーコン土寄せ
10月	落花生収穫・ボッチ作り
11月	落花生脱粒・煎り
12月	ヤーコン収穫

「落花生収穫の授業」

プロジェクトの成果報告

私たちの団体は、阿見町の方々との交流を大切にしながら“食”と“農”への興味、関心を広げ、阿見町の農業を活性化するために、以下の3つの活動を行った。

①遊休農地を利用した食農教育

○目的

阿見町認定農業者と連携した遊休農地の開墾をし、小学生とその保護者を対象にそばの種まきからそば打ちまでの過程を体験して“食と農”に興味、関心を持ってもらう。

○内容

阿見町内の親子を対象に体験型のそば栽培を企画、運営した。

○成果

阿見町内の遊休農地約１haを開墾し、そば栽培に利用。自治体、地元農家と連携しながら活動を展開することができた。

また、参加者の食と農に対する意識の向上がみられた。新聞（茨城新聞、日本農業新聞）に取り上げられ、活動を多くの人に周知することができた。

遊休地を食育の場に
茨城大生がプロジェクト 親子でソバ作り体験

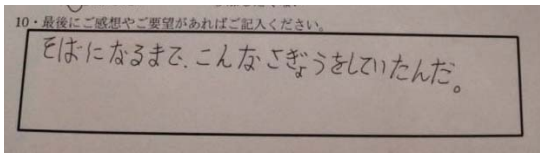
営農課題 自ら
栃木・JA佐野青壮年部 ポリシーブ

地場農産物
東京でPR

「日本農業新聞で掲載された記事」

○外部評価（参加者へのアンケートから）

・苦労して作ったから残さず食べようと思った。
・そばをこねて丸める作業が楽しかった。
・１から作物をつくることの大変さ、楽しさを学んだ。
・以前に比べ農業に対する関心が高まった。
・子どもの希望で自宅の庭に畑を作った。
・そばだけでなくトマトなどの野菜や米の栽培をしてみたい。


10・最後にご感想やご要望があればご記入ください。
そばになるまで、こんなさぎょうをしていたんだ。

アンケートからも、食や農に興味、関心を持ってくれたことがわかる。

○今後の展望

広報活動とイベントに向けての準備を徹底し、日程を早めに設定する。耕耘機などの技術・知識を持っている人が少なかったため、知識を共有し、各自積極的に活動に参加する。遊休農地の開墾した土地で、そばだけではなく、他の野菜も栽培していく。

「遊休農地開墾前の様子」

「開墾の様子」

「そばの種まき」

「そばの収穫」

「昔ながらの脱穀機で脱穀」

「そば打ち体験の様子」

②廃棄野菜を加工した商品開発

○目的

規格外・余剰野菜を有効活用する。

○内容

農業生産現場では総生産量の約20％が商品価値の低い規格外野菜とみなされる。これら廃棄野菜を加工・商品化する。

○成果

小学校農園の廃棄予定の落花生を加工して鍬耕祭で販売することができた。また、パネルを設置し、来場者に活動内容をPRすることができた。

「鍬耕祭　パネルで活動紹介、ＰＲ」

「落花生のつかみ取りの様子」（左）

「鍬耕祭での販売したピーナッツクリームパン」（右）

○外部評価（連携先からの意見、鍬耕祭でのアンケートから）

廃棄野菜の活用よりも阿見町の特産品づくりの方が、地域活性につながるのではとのご意見をいただいた。また、加工食品の種類を工夫することによって、売れる商品づくりをする必要があるとの指摘を受けた。

規格外野菜は、安価で販売されているものは「買いたい」との意見が多かった。

○今後の展望

計画、クリアすべき問題の予測が足りなかった。法的問題、商品製造に必要な場所、管理者、保健所の検査のような問題に柔軟な対応ができなかったという反省を生かし、商品化よりも廃棄野菜の有効活用に重点を置く。廃棄・余剰野菜の現状を知る、伝える活動（鍬耕祭、阿見町での物産展などで）を行う。そして、農家とのコンタクトを綿密にとる。

「鍬耕祭での販売の様子」

③小学校農園の管理ボランティア

○目的

JA茨城かすみとともに円滑な食育事業を行う。

○内容

定期的に農園の除草作業等を行い、農園の環境が良好に保たれるよう活動した。また、収穫体験など食育授業への参加も積極的に行った。

「除草作業の様子」

○成果

小学生と大学生が交流できた。作物の生育が良くなり、収穫量が増えた。

農場の環境を良好に保ち、JA茨城かすみの食育事業の負担を軽減することができた。

日本農業新聞に活動が掲載された。

JA食育事業を応援

茨城大学農学部の学生が、ＪＡ茨城かすみが阿見町で取り組む食育事業の応援に乗り出した。食育を通して地域貢献に努める。16日には、阿見小学校の学校農園でＪＡの担当者共に草取りの作業に汗を流した。

炎天下で学校農園の草取りに汗を流す茨城大学生

茨城大農学部生ら 阿見町8小学校で 農園管理に汗

同町は2001年度から町内の全8小学校で食育事業をスタートし、今年度からJAの事業として取り組む。ラッカセイの種まき、マルチ剥がし、収穫、堆肥すき、ポッチ作りなど、地域に伝わる農法を教え、体験の成果や感想は校内発表会で報告したり、絵や作文にしたりする。

土づくりやマルチ張り、通常の管理はJA阿見営農経済センターの食農教育担当職員が行う。

町にある同大学農学部の学生有志は、大学の13年度「学生地域参画プロジェクト」に参加。プロジェクト名は「のらボーイ&のらガールの食の教育プロジェクトNoupFood、農Life」。学校農園でのボランティア活動、遊休農地を活用した親子でのソバ栽培、売れ残りの野菜の加工利用検討に取り組む。

大野莉紗プロジェクトリーダーは「農業を通して子どもと触れ合い、食や農の大切さを共有することで地域に貢献したい」と意義を強める。

学校農園でのボランティア活動は7月から始めた。メンバーは約40人。手間の掛かる草取りなどを手分けして行い、収穫祭などにも参加する。来年2月に予定する地域センターの食育フォーラムやプロジェクト報告会で、活動成果を披露する計画だ。

8月には遊休農地約20アールでソバの種まきを行う。親子で参加し、ソバ栽培を体験し、食育の新展開を探る。（茨城・南部）

○外部評価（小学校教員へのアンケートから）

・農園を見に行く児童や報告する児童が増えた。
・食べ物の好き嫌いがなくなった。
・食べ物を大切にするようになった。
・大学生が食育活動を手伝っていることを知らなかった。
・農学部の専門性を活かした活動をしてほしい。
・保護者も交えた活動をしてほしい。

（ＪＡ茨城かすみＨＰより　食育事業担当者様から）

「茨大生の皆さん６ヶ月間本当にありがとう。辛い仕事にも弱音を吐かず、いつも明るく元気に頑張ってくれました。作物の成長期から収穫に至る事業のピーク時を応援いただき、おかげ様で行き届いた圃場管理を行う事ができました。御苦労さまでした。」

○今後の展望

積極的に関わりをもってくれる先生方が少なかったため、先生方のプロジェクトの認知度を上げる。また、小学生との交流が少なかったので、活動日を指定して小学校に知らせるなどの工夫をして調整をし、小学生との作業の頻度を増やす。

「マルチはがし授業の様子」

「落花生の収穫授業の様子」

「ボッチ作り授業の様子」

「給食に使用するヤーコン収穫の様子」

＜全体を通してのまとめ＞

○活動報告

小美玉市で実施された「いばらきオーガニックフェスタ」でポスターセッションへの参加。活動報告、ＰＲを行い、農業生産者の方々や食・農に関心のある来場者と交流することができた。

「オーガニックフェスタでの様子」

○成果

関わりを持った方々の食、農の興味・関心を広めることができた。阿見町をより知るきっかけや、農業体験の機会、交流の場を提供することができた。

農学部としての専門性を深めることができた。充実感を得ることができた。

○今後の展望

遊休農地を利用した食農教育、廃棄野菜を加工した商品開発、小学校農園の管理ボランティアの３つのプロジェクトを融合させた食農教育を展開してゆく。

今年度作った地域とのつながりを大切に生かし、ネットワークをさらに広げていく。